

W  
OMEN'S



NEWS

2011 MAR.

VOL.49

S  
PORTS

F  
OUNDATION



女子ラグビーも2016年のリオデジャネイロ五輪から正式種目へ  
(フォート・キシモト)

J  
APAN

Message 地域再生の助っ人はスポーツと女性 ミツ谷洋子	2
インタビュー 「女性の職業として確立したエアロビクス・インストラクター 鶴見幸子さんに 30 年の歩みを聞く」	3
Women's Sports 米国 WSF が取り組んできたこと 山崎恵司	6
Column アメリカの風「女性スポーツ便り」第4回 羽石架苗	7
Member's Room	8
事務局便り	9

## 地域再生の助っ人はスポーツと女性

この度の東北大地震で被災された方々には、心よりお見舞い申し上げます。未曾有の大災害は日本のあらゆる分野に大きなダメージを与えましたが、これをキッカケに、これまで様々なしがらみや前例に縛られて取り組むことが難しかった真に心豊かなまちづくりを実現できればと願っています。

### スポーツ振興は環境整備から

私の本業の名刺には、会社の『代表取締役』という肩書きと並んで、『「スポーツとまちづくり」アドバイザー』という肩書きもあります。公的機関の資格ではなく、いわゆる「自称」。これまで私は「スポーツジャーナリスト」や「スポーツビジネスコンサルタント」などとして、長くスポーツの世界で仕事をしてきました。国内外の様々なスポーツ大会やスポーツ施設取材し、スポーツ振興に向けての政策提言やスポーツ産業の振興事業にも関わってきました。

仕事によって肩書きを使い分けてきたのですが、いつも念頭にあったのは、日本の人々が欧米のようにスポーツにより親しめるようにするにはどうしたらよいか、ということです。そして、様々な仕事を通して得た結論は、人々が日常的にスポーツに親しめる環境を整えることが最も重要だということでした。

### 「スポーツの里ふたば」

5年ほど前、2年間にわたり仕事で福島第一原発、第二原発のある福島県双葉地域に何度も足を運びました。「スポーツの里ふたば」と名づけた、スポーツによる地域活性化事業の青写真作りを、私の会社でお手伝いしたのです。

双葉郡に限らず、原子力発電所のある地域には、毎年、国から原発設置の“迷惑料”として多額の交付金が支払われています。双葉郡8町村はその資金を活用して、陸上競技場、野球場、体育館など数多くのスポーツ施設を整備してきました。

そうしたスポーツ施設と宿泊施設を連携させ、スポーツ合宿やスポーツ行事で県内外からの交流人口を増やし、地域振興を目指そうというものでした。「スポーツの里ふたば」を実現させるための具体的な計画作りをする検討委員会には、自治体担当者のほか、民間から商工会、青年会議所、スポーツ団体、女性団体などの代表が出席していました。

### ライフワークの1つに

第一原発事故により、双葉郡と隣接する地域住民が、まちぐるみの避難を余儀なくされています。とても心配になり、検討委員会でお会いしたNPO法人ハッピーロードネット理事長の西本由美子さんに連絡してみました。

西本さんは常磐道を中心に東北地方の中学生や高校生を巻き込んで、地域の活性化に取り組んでこられました。避難命令の翌日、ご家族ともども大学生の息子さんが住む都内のアパートに避難されていました。

帰宅の時期も分からない状況下にある西本さんの言葉が胸に残りました。

「いつになるか分かりませんが、私は必ず福島に帰って、またまちづくりをしていきます。ミッ谷先生には、是非、これからのまちづくりにも頑張ってください。どうかお願いします」。

東北地方をスポーツで活性化する一。私のライフワークの1つになるかもしれません。

## インタビュー

### 女性の職業として確立したエアロビクス・インストラクター

#### 鶴見幸子さんに30年の歩みを聞く

かつて女性スポーツとして一大ブームを巻き起こしたエアロビクスダンス。このスポーツを先導してきたインストラクターが、時代の流れの中でどのように受け入れられ、また、現在ほどのような課題を抱えているのでしょうか。エアロビクスが日本に上陸して30年。当初から関わり、社団法人日本フィットネス協会の理事長を務めていらっしゃる鶴見幸子さんにお話を伺いました。（聞き手：永田千恵）



鶴見幸子理事長(東京・文京区の日本フィットネス協会事務局にて)

### きっかけはテレビ番組の制作

— まず、鶴見さんがフィットネスと関わるようになったきっかけから聞かせてください。

鶴見 そもそも私は文系の人間でスポーツとは縁がありませんし、今でも指導者団体にながら指導者ではありません(苦笑)。完全な事務方です。そんな私がこの業界に飛込んだのは、テレビ番組がきっかけなんです。

— テレビですか。

鶴見 エアロビクスが日本に上陸した(1981年)翌年、TBSが夜中に「エアロビサイズ」という5分間の番組を放送していました。私はこの番組の制作会社で、英語ができるということで関わっていました。スポンサーは大塚製薬。オロ

ナミンC。この商品のCMは当時、男性が起用され、男性のものというイメージが強かった。女性にも飲んでもらいたいということで、米国から指導者を呼んで、東京や大阪など全国7都市で華々しく体験イベントを展開しました。

イベントの“キャッチコピー”は「オロナミンC」の「C」に「She」をかけて、「シー・イズ・ビューティフル」。その後、番組制作の親会社がエアロビクスのブームに乗ってスタジオをつくることになり、企画立ち上げからかかわりました。そうしていつの間にかエアロビクスの世界へ踏み込んでいったというのが正直なところ(苦笑)。なんで番組制作会社に残らなかったのかと思いますが、技術屋ではないし、ディレクターの才能もなかった。語学ができることで入社し

## インタビュー

たので自分がより生かせる場所がこの業界だったということですね。

— 当時、エアロビクスは大変なブームでした。

**鶴見** なぜあんなにブームになったんでしょうね？ 健康のためとか、痩せるといった切り口がよかったのか、一気に火が付きまして。



米国のコンベンションで講師やお子さんたちと

— ハイレグのレオタードとレッグウォーマーというファッション性も大きかったですね。

**鶴見** 番組制作の親会社がファッションメーカーの JUN さんでした。スタジオはファッションナブルな原宿で、今は GAP がある「セントラルアパート」です。コーヒを飲みながら、見られる、見えるという、何ともおしゃれな演出でしたね。

— そうそう、ありました！

**鶴見** 若い女性に人気でした。アパレルの店員さんから商社や銀行の OL、今でいうキャビンアテンダント。皆がエアロビクスに夢中になりました。

### 注目された女性の新たな職業

— その中で協会の役割は？

**鶴見** エアロビクダンスの普及・発展、情報発信を目的に任意団体としてスタートし、その後、旧厚生省の所轄として社団法人日本エアロビクフィットネス協会となりました。07年に名称を「日本フィットネス協会」に変更し、それにあわせて、ピラティス、ヨガなども含めて、あらゆるものの情報発信、研修会などを行っています。

— 現在、会員は何人ですか？

**鶴見** 3000人くらいでしょうか。女性が多く、男女比でいうと2:8くらいです。

女性のライフスタイルは様々で、転勤や出産で辞める人、逆に戻ってくる人と、年間で400人ほど入れ替えがあります。

— 会員はインストラクターですが、これまで日本にはなかった仕事でした。スポーツ経験がなくてもできるのが画期的でしたね。

**鶴見** そうなんです。養成コースに通って技術と理論を身につければ指導者になれます。エアロビクスを始めた OL さんたちがいつしか目覚めてしまい、仕事を辞めてインストラクターになった人もかなりいました。

大手商社やキャビンアテンダントを辞めた人もいましたね。それくらい魅力があったんでしょう。確かに、音楽をかけて体を動かし、汗をかくということで気持ちが高ぶる。しかも、自分の作ったプログラムと指導で大勢の人を一気に動かすことができるという魅力があります。

— そのうえ、その人たちが目の前で変わっていき、「気持ちよかった」「すっきりしました」というやりとりが毎日あるわけですから、大きなやりがいや喜びを感じるのはわかる気がしますね。

— まさに女性にとって新しい仕事でした。

**鶴見** 手に職という意味で、そういう実感があつたのではないのでしょうか。アメリカ人の指導者とこんな話をしたことがあります。「エアロビクスは欧米でも女性のもの。だから、男性指導者はとても優遇されてずるいよね。男ってうただけでちやほやされる」って（笑）。

— 一般社会とは逆ですね。

**鶴見** ただ最近はお客様の年齢が高くなり、男性もかなりいらっしゃいますので、指導者に男女差は関係ない気はしています。

— 協会の理事16人（会長・副会長含む）のうち過半数の9人が女性。しかも理事長が鶴見さんです。

**鶴見** 私は任意団体のときは幹事として関わり、その後、常務理事、10年くらい前に理事長となりました。男性理事にはバランスをとる意味で入っていただいているというところもあります。

— 女性が理事長という組織は珍しい。

**鶴見** よくそういわれます。組織はどうして男性

## インタビュー

中心になるのでしょうか。うちはまだ若い団体ということや、女性からブームの火がついたこともあって、女性が多いんですが、意識としては男女差を考えたことはあまりありません。海外にいけば、男女どちらもたくさんいますし、ものを作り上げるのに男女差はないですからね。

### 日本は専業、米国では主婦の仕事

— アメリカとはどんな点が違いますか。

**鶴見** 日本の方が専業でインストラクターをやっている人が多いですね。米国は主婦が多く、ご主人がちゃんと稼いでいるからフルにやらなくてもいいという人が多い。それと、パーソナルトレーナーが中心になってきていますね。

— トレーニング系が主流になっているのですか。

**鶴見** はい。米国では集団でやるプログラムは減っています。逆に、日本人は集団で踊ることを好みます。外国人インストラクターは、日本人には楚々としたイメージを持っているようで、それを知ると驚くんですよ。日本人はダンシングが好きなんだって。日本はもともと“踊る阿呆に見る阿呆”なんですよ（笑）。

— 近頃、インターネット系のフィットネスが出てきていますが、日本では生身の人間が行うレッスンは廃れないと思っています。

— 折からの不況でフィットネスクラブは厳しい状況にあると聞いています。女性インストラクターの現状はどうですか。

**鶴見** 民間のクラブはどこも経営が厳しい。ここで1レッスンいくら、という形で雇われているいわゆる個人事業主は、本当に大変ですね。東日本大震災のようなことが起こってスタジオを閉めますといわれた場合、給与保障が契約に含まれていないインストラクターはかなりいます。

— そうした中で、インストラクターはエアロビクス1本だったところから時代の流れにあわせてヨガを身につけたり、ピラティスにいたり、いろいろ自分の枝葉を増やしています。年齢が40代、50代になってくると、自宅近くに小さな部屋を借り、地元の人に向けた少人数制のレッスンを行っている人も増えてきました。20代の頃よう

な指導ができなくなると、対象をベビーからシニアまで、縦軸と横軸、いろんな組み合わせを考え、自分の環境に合わせてテーマを選択し専門性を高めています。すごいですね。



「ファンクショナル・リーチ」講座を指導する高順姫先生(2010年6月Jafa東京フォーラム)

— メタボ対策で需要は非常に高まっています。今後の展開はどのように考えられていますか。

**鶴見** 今、お話ししたように、フィットネスクラブに頼らない指導現場やキャリアをどのように開拓していくのか。協会はそうした情報をもっと出していかなければいけないと考えています。

— 先駆者から情報を学び、皆さんに提供できればいいですね。指導者のキャリアはこうでなければいけないというものは何もないので、そういう意味では自由度の高い職種だと思います。これからは指導者同士の連携をもっと強くしたいですね。

— 一人ひとりが個人事業主となると確かに難しく、横にいる人は競争手になります。しかし、それはどの商売でも同じ。横のつながりができて、やっと本当の意味での指導者集団になるのではないかと思いますし、それがインストラクターの地位向上につながると考えます。

— その時、協会としてはどうされますか。

**鶴見** 現場で模索している指導者に様々な情報を提供すること。個人で活動する会員にとって、何かの拠りどころにさせていただけるといいですね。

**<鶴見幸子さん略歴>**20歳までロンドン、ワシントン、パリ、ジュネーブなど海外と日本の生活が半々という帰国子女。英語力がエアロビクスとの縁を結んだ。しかし、未だ運動とは無縁な生活を送っている。1957年、インドネシア生まれ。

## 米国WSFが取り組んできたこと

第1号のWSF ジャパンニュースが発行されたのは、1982年春。今年は、ちょうど30年目になる。ホームページには、過去のニュースがデータベース化されており、閲覧できる。第1号を開いてみると、発足記念パーティーの出席者と会員のリストが掲載されている。54人中、下から5番目に自分の名前を見つけ、当時に思いを馳せた。

個人的な思い出のような出だしで申し訳ないが、本稿の目的は当然、そんなことではない。WSF ジャパンは「女性スポーツ財団日本支部」という。女性スポーツ財団という団体の日本支部という位置付けだ。では、本部とも言うべき、米国のWSFはどのような組織で、どんな経緯をたどってきたのか。この機会に、あらためて考えてみたい。WSFのホームページ(HP)とウィキペディアを参考にした。

WSF (Women's Sports Foundation) は74年、女子テニスの名選手ビリー・ジーン・キングによって創設された。性差別との戦いでも大きな足跡を残したキングを、HPでは「社会変革と平等のチャンピオンであり続け、20世紀で最も尊敬され、社会に影響を与えた人物である」と紹介している。

米国では60年代からウーマンリブなど女性解放運動が高まりを見せていた。WSFは、そうした米国社会の潮流がスポーツの分野で具現化した組織だと見ることもできる。

キングを支え、創立当初の実務面で大きな役割を果たしたのが、初代会長ドナ・デ・パロナと初代専務理事エバ・オーチンクロス、資金調達責任者ホリー・ターナーだった。このトリオが財政基盤を確立し、組織運営を軌道に乗せたといえる。

オーチンクロスは76年、専務理事に任命され、組織の構築に尽力した。64年東京五輪の女子400メートル個人メドレーなど水泳2種目で金メダルを獲得したデ・パロナはその後、スポーツキャスターとして活躍。79年、会長に就任すると、人脈と知名度を生かして、WSFを確固とした組織に成長させた。プロテニス団体でグッズ販売を担当していたターナーは78年に引き抜かれた。

キングの獲得賞金5千ドルの小切手を基に発足したWSFは、1千万ドル規模の予算で運営され

るまでに大きくなった。キングが掲げた理念を、有能な3人のスタッフが具体化していった。

HPによると、WSFの使命は「スポーツと身体活動を通じての少女と女性の生活向上」。これに基づき、女性がスポーツに参加できる環境整備のための様々な活動が行われている。大きく分けて(1)練習や遠征の費用補助による競技力向上(2)72年に制定され、連邦政府の予算による教育活動での男女差別を禁じた法律「タイトルIX(ナイン)」の活用(3)研究、調査、啓蒙活動となる。

フィギュアスケートのクリスティ・ヤマガチやミシェル・クワンは、WSFの遠征練習補助制度の受給者。2004年アテネ五輪と06年トリノ冬季五輪には、補助を受けた計33選手が出場し、計5個のメダルを獲得した。95年から2年間、WSF会長を務めたウェンディー・ヒラード(新体操出身)は「遠征練習補助を受けたので、お返しするのが会長を引き受けた理由」と述べている。

「タイトルIX」は日本ではなじみが薄いが、WSFは女性のスポーツ参加の環境を改善する武器として、こうした性差別を禁じた法律を活用してきた。その結果、女子大生選手が得る奨学金の総額は72年に総額10万ドルだったものが、08年には6億1700万ドルに増額。さらに高校で部活動に参加する女子生徒の割合は72年には27人に1人だったのが、06年には5人に2人へと大幅に改善された。

WSFの存在感は大きく、全米大学体育協会や米国オリンピック委員会、国際オリンピック委員会、さらには国連からも認知を得た。活動は多岐に渡っており、ここに紹介したのは一部分である。平等を求め、あらゆる差別に反対する方針は徹底している。

HPには、人種や障害による差別、さらにはレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、性転換者(LGBT)など性的少数者への差別をなくす活動にも取り組んでいる。

日本と米国には文化と社会制度の違いがあり、一概に比較はできないが、WSFの歩みは日本支部にとっても、参考になるのではないだろうか。【やまざき・えいじ】 通訳勤務、WSFジャパン会員

山崎 恵司

アメリカの風「女性スポーツ便り」第4回

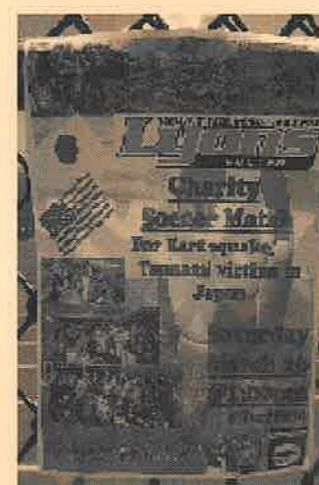
## 日米女子サッカーチャリティーマッチで日本支援

羽石 架苗

東北地方の地震津波は、アメリカでも大きく報道されました。私が監督をしているマントホリヨーク大学サッカー部は3月26日に、チャリティーマッチを行いました。私が日本人というだけでなく、昨年1月にチームが日本に遠征したり、卒業生が日本で英語を教えていることなど、日本とは何かと関わりが深いことが背景にあります。

### 女性スポーツリーダーが大活躍

人々の反応は、予想をはるかに超えるものでした。特に、女性のスポーツリーダーが中心となり、スポーツに関わる女性たちが日本のために協力して、イベントを開催することができました。



チャリティーマッチのポスター



受付には募金箱が置かれました

宣伝係、会場係、運営係、ギフト係などに分かれ支えてくれました。地元の新新聞やテレビが取り上げてくれたこともあり、当日の観客は300人以上にもなりました。試合は我がサッカー部が、日本から遠征してきてくれた「ブリッジ」

(小林美由紀監督)と対戦しました。テレビでも報道され多くの人たちにこのイベントを知っていただくこともできました。

寄付は大学関係者以外からも集まり、スポーツを通じた人



日米サッカーの「女子力」で東北を支援しました

々の団結力の強さを肌で感じました。寄付金3000ドル(約27万円)はプレスレットの売上とともに日本赤十字社に送られました。

### スポーツの力に感動した出来事

スポーツで得る貴重な体験、スポーツの場での人との出会いなど、スポーツを通しての平和の促進が国連機関などを中心に世界中で行われてきています。国連の活動に比べれば、小規模ですが、「何か自分のできることをしたい」と願った多くの人たちが、サッカーでつながり、サッカーを通して日本のために寄付金を集めました。

スポーツというものが、試合の勝ち負けだけではなく、とても大きな深い力を持っていることに改めて感動した出来事でした。そして、そのスポーツに関わって仕事ができる自分の環境に改めて感謝しました。

日本のみなさん、世界中で多くの人たちが日本のいち早い復興を心から願っています。

【はねいし・かなえ】日本女子サッカーリーグ(ジェフ市原)でプレーした後、米国にサッカー留学し全米優勝を果たす。現在、セミプロチーム「ニューヨークマジック」キャプテン。マントホリヨーク大学サッカーチーム監督の傍ら授業も担当。コーチ学・体育教育学専攻(Sport Pedagogy)博士号取得を目指している。WSFジャパン会員。1978年生まれ。